

淀川決壊と地下街

写真は大阪「塚本幼稚園」近くの淀川堤防。川の向こうに、大阪駅前・梅田界わいの高層ビル群が見える。河川敷では野球を楽しむ人、散歩を楽しむ人が大勢いた。すこし歩き疲れたので、腰をおろしてぼんやり景色を眺めた。

日本経済新聞 3月1日朝刊「中部経済 災害と地域」のなかで、淀川決壊と地下街について書かれていた。「地下鉄が洪水被害増幅」と、気になる記事なので紹介したい。



昨年8月、近畿地方整備局や大阪府・市などでつくる検討会が公表した水害対策のガイドライン案は、防災関係者に波紋を広げた。想定される最大の降雨で淀川に近い堤防が決壊した場合、浸水は大阪市都心の南部（ミナミ）の心斎橋、難波地区にも広がるとの想定だったからだ。

大阪市を中心に地下鉄関係者などが集まる「大阪市地下空間浸水対策協議会」は、都心北部（キタ）の梅田を中心に被害を想定し、対策計画を策定していた。ミナミの対策計画は予定すらない。

浸水経路は意外だった。地上ではなく地下を通じて、キタからミナミに洪水が押し寄せるといなのだ。想定では堤防決壊から3時間後に梅田の地下街が浸水。同9時間後に心斎橋の地下街、同10時間後に難波が浸水する。

大阪都心部の地下街は数多くのビルの地下と接続し、地下鉄の駅につながっているため、地下鉄に水が流れ込む場所は無数にある。地下鉄駅の通路などに止水扉があるが、大洪水は防げない。

人的被害を減らすには迅速な避難がカギとなる。淀川が決壊すると、洪水の水位は地上4メートルに達する恐れがある。協議会はビル3階以上への避難誘導を打ち出した。昨年11月14日朝、大阪市営地下鉄や地下街各店舗の防災担当者、警察、消防など300人以上が参加した防災訓練では、地下鉄なんば駅が浸水したと想定。参加者らは同駅から地下街を通して接続するビルの3階以上への避難を呼びかけた。大阪地下街の井下泰具取締役は「接続するビルが多く、地下鉄にもつながる地下街は、いかに早く逃げるかが勝負」と話す。

名古屋でも、庄内川が決壊すると名駅周辺、地下街への浸水が懸念されている。大阪と同じく、浸水は地下鉄を通じて栄まで広がるのだろうか。

(2017年3月12日)